

《紅樓夢》の宴うたげについて

斎藤 喜代子

まえがき

岩波文庫『紅樓夢』（一）の解説において、訳者松枝茂夫は次のように記している。

昨冬初めて幸田露伴翁に拝眉した際、翁は「紅樓夢」はどうも飯を食ふところばかり多くて……」と云って呵々大笑され甚だ感を深うしたことであつたが、これは又同時に紅樓夢への最上の讚語として頂戴してもいゝかと思はれる。ここには花々しい戦争とか神奇怪異の事などは絶えてなく、あるのはたゞ家庭閨閣内の平々凡々なる日常茶飯事である。——
と。⁽¹⁾（傍点筆者。以下同じ）

たしかに《紅樓夢》には飲食のことが多く描かれている。楊和氏によれば前80回中、大小の酒宴は百十回の多きに止まらぬといふ。⁽²⁾いかにも露伴の指摘するとおりである。露伴が《紅樓夢》を読んで、いちはやくこの書の構成上の一特性を指摘していることはさすがである。しかし露伴のいう「どうも」の語が、もし辟易を意味するものであるならば、それは《紅樓夢》を読む上においてどうもいただきかねるように思われる。

《紅樓夢》に飲食のこと、とりわけ宴の模様が執拗に描かれているのは何故だろうか。《紅樓夢》における宴の意味する

ところを以下に考察してみることとする。

一、宴うたげの描写について

先にも述べたとおり《紅樓夢》における飲食に関わることを抽出するとすれば、それはおそらく毎回毎次、《紅樓夢》の果てて終るところまで限りなく続いて、到底数え尽くすことはできないであろう。従ってまた《紅樓夢》の飲食に関わる論述も多い。たとえば郭若愚の『《紅樓夢》飲食譜——兼論《斯園膏脂摘録》』、陶文台の『紅樓飲談』、陳詔の『從《紅樓夢》看清代的筵宴風俗』、朱家華の『紅樓宴淺識』及び『紅樓美食、文化瑰宝』等々である。

しかし、これらが先に挙げた楊和氏の論述を除いては、その大方が《紅樓夢》の宴席上の具体的な佳肴の名目の陳述であったり、その食品の料理法であったり、宴席の規模、規格、順序、座位、礼儀、飾り付け、余興、費用に関することであり、あるいはまた《紅樓夢》に出る食品の数は186種、その殆どは揚州料理が主体であるとか、いかにも食文化の国ならではの方向に傾いた論述が多い。《紅樓夢》を読む上においてこれらの論述が側面的に果す役割は大きいと思うが、こと「食」となるとどうしてこういう方向に傾くのか、中国文化の体質の重要な一端を窺いみるような気がする。

それはともかくとして、ここでは《紅樓夢》120回中における主たる宴のいくつかを抽出し、その描写の手法を分析してみることとする。

(一) 前80回における宴うたげの描写

第11回には、寧国邸の当主である賈珍の父賈敬の誕生祝いの模様が描かれている。賈敬は現在隱居の身で、郊外の道観で

専ら仙人になるための修行に凝っているという人物である。従って彼は誕生祝いのために帰宅したのでは修業の妨げになるという理由から、「一門の者が祝いに来たら手厚くもてなせ。自分は戻らぬ」と命ずるだけである。そこで寧国邸では当人不在のまま二日間の祝宴を張ることとなる。幾幕かの芝居が掛けられ、一族の者が集って賑やかに過す——ここには祝宴そのものの描写についての詳述はない。けれども、これだけの記述の中にわれわれは賈家の、とりわけ寧国邸の内部事情の一端を窺うことが出来るはずである。

一つは、隠居の身とはいえ寧国邸の最上位にある人物が怪しげな道術に凝り、家務一切を顧みないということ。であれば寧国邸を背負って立つ嫡子の教育などはいふも愚かである。かくのごとく、一代から一代へと示しのつかぬ家長によってやがてもたらされるものは何か。ここにはすでに寧国邸の行く末に関わる、いや、賈府一門に関わる重大な種が埋伏されているのである。

また一つは、賈敬の嫡孫である賈蓉の妻秦可卿の病状についてである。彼女は得体の知れぬ病にとりつかれて二十日余り、医者よ薬よと手当てを尽くしても一向に好くならない。可卿自身もそれほど長くは持つまいと思っている。従って賈敬の祝宴にはもちろん出席できない。寧・榮両邸の女性たちはめでたい祝宴の中で誰も彼もが一抹の不安を払拭しきれない。寧国邸の、外には輝かんばかりの威光を示しているかに見えて、実は内部に文字通りの病根を抱えているという不安要素がここに提示されるのである。

第17・18回は、正月十五日上元の日、元春貴妃（賈政の長女）の省親を迎える最も重要な宴の描写である。作者は最大限の筆を以てこの日の饗宴を描写し尽さんとするがごとくである。しかし遂に「その豪華富麗のさまはとても形容し尽くすことはできない。読者の想像に任す」と筆を投げる。賈家一門にとっての最大最高の栄誉がここに実現し、上も下も挙げてこの省親の宴を慶賀するわけであるが、作者はこの盛宴の中におよそ誰もが予測せぬことを記述する。それは貴妃の流す涙で

ある。

彼女は、自分が人に会うこともかなわぬ遠い場所へ送られてしまい、富貴を極めた身分とはいえ天倫の楽しみを全うすることも出来ぬという嘆きを、そしてまた、このつかのまの対面のあとはいつ会えるかも知れぬという悲しみを、さめざめと涙を流しながら訴え、うしろ髪ひかれる思いで大観園をあとにするのである。今ときめく賈家一門の栄光が、実はこの一人のかよわき女性の涙を代償として築かれていることを読者はここに知らされるのである。

第22回は元宵の宴についての描写である。貴妃より灯謎(とうみ)が届けられたことにはずみを得た賈母（賈家の最高権力者）が、一門の子供やら孫やらを集めて灯謎に打ち興ずる場面である。あや絹を張った飾り提灯が所せましとばかりに掛け渡され、酒や果物、それにとりどりの玩具が用意されて、謎を解き当てた者に褒美としてとらせるという風雅な正月行事である。この日、貴妃より届けられた謎をはじめとして子供たちはみなそれぞれ一つずつ謎を作ると、それを飾り提灯に張りつけた。いま上元のめでたき節句、世はすべて事もなく一家こぞってここに団居(だんぐ)するという、至上の幸福を思わせる場面である。ところが作者は、この華やかな灯のもとに繰り広げられる限りなく幸福な宴席に、ふっとその灯の陰影(かげ)を落して見せることを忘れない。

それは、子供たちが作った灯謎を見た賈政（賈宝玉の父）の胸をよぎった一抹の不安である。子供たちの作った謎の答えがそれぞれ爆竹・算盤(そろばん)・風箏(たこ)・海灯（お灯明）といった類であることによるものである。貴妃の作った謎の答えの「爆竹」は一たび音を出したら散じ果ててしまうもの。迎春の答えの「算盤」は弾けば麻のごとく乱れるもの。探春の答えの「風箏」はふわふわと浮いて定まらぬもの。惜春の答えの「海灯」は清浄狐独を予想させるもの。どれ一つを取ってみても何とはなしに不吉を予感させる。将来(あき)のある若い子供たちが揃いも揃ってこうした縁起でもないものばかりを取り上げるとはどうしたことだろうか。賈政はがっくり首うなだれてしまうのである。

第38、39回は、宝玉のもとに届けられた白海棠にことよせて、大観園の姉妹たちが海棠社という詩社を結成することとなり、史湘雲の発案で結社第一回の集いの宴が催される場面である。折しも蟹の季節とあって、それでは木犀の花を賞でつつ蟹を味わい、かつ詩を吟じようということになる。この日、賈母を始めとして侍女たちをも含めた大勢の女性たちが大観園に集う。もちろん賈宝玉も加わる。花は見頃、それに幾甕もの美酒、たっぷり身の入った大籠何杯もの蟹、誰も彼もがこぞとばかりに存分にはしゃぎ回るが、これが賈家を訪れた劉婆さんのいうように「阿弥陀仏あまのたいなや！これ一回にかかる金だけで、わしら百姓なら優に一年は暮らせませすだ」というほどの贅沢であるなどと、一体誰が考えるだろうか。来る日も、来る日も、大観園はいつもながらに華やいでいるのである。

ところが、この盛宴描写のあとに気になることが記されている。一つは榮国邸の御納戸方をつとめる王熙鳳の金貸しにまつわることである。それは各部屋に渡される月々の手当てが、この月は遅れているのは何故かということが侍女の口から洩れるのである。それは、実は熙鳳が表の勘定方からはすでに受け取っているのだが、その公金を人に貸し付けて莫大な利子を稼いでいたのである。賈家の裏方はこの男まさりの熙鳳の才腕によってこれまでどこからも指一本指されるようなことはなかったはずである。それがどこからともなく狂い始めてきていることを作者はここに暗示するのである。

また一つは、榮国邸を訪れた劉婆さんが賈母のご機嫌をとり結ぶべく田舎ばなしのあれこれを話してきかせるが、その話が柴草を抜きとって焚き火をする段に及んだ途端、中庭の厩うまやから出火するという事件が起こる。やがて火の手は収まって大事には至らぬまでも、賈家にしのび寄る得体の知れぬうす気味悪い予兆を感じさせる場面である。

第44回は王熙鳳の誕生祝いの描写である。彼女は賈母のお気に入りであって、この日は賈母の肩入れのもとに新しい趣向で賑々しい宴が用意される。寧・榮両邸の奥方を始め、姉妹たち、また日頃召し使うすべての女中たちから祝杯を献じられ

て、彼女はこの日、賈家における自己の存在を存分に誇示しえたかに見えた。

ところが、得意に酔いしれる彼女の足もとをすくうような事件がすぐそのあとに持ち上がっているのである。それは熙鳳の夫賈璉と使用人鮑二の女房との密通事件である。事は露見し、ついに鮑二の女房が首を吊って死ぬといういまわしい事件である。榮国邸の奥を預かり、四方八方に睨みをきかせて寸分なりとも手ぬかりなどなかつた王熙鳳が、こともあろうに自分の夫の不始末をここにさらけ出してしまふ。うわべはいかにも礼教を尊び子弟の教育には厳格と見える賈家ではあるが、内面は実はその子弟たちの乱行によって腐蝕されつつあることを作者はここに示すのである。

第53、54の両回には、除夕から元宵にかけての一連の正月行事が詳細に描写されている。師走の声をきくと同時に寧・榮兩邸における人の出入りは一段と多くなり、一段と忙わしくなり、従つてまた事は一段と繁く、一段とややこしくなる。宗祠まゝの清掃、歳暮の用意、朝廷から賜る祭祀料の受領、招宴の日取り、小作料の受取り等々、上も下も、表も奥も、みなてんてこ舞いで年の瀬に押されていく。かくて万端整つたところで除夕を迎える。宗祠みたまを拝する荘厳な式典、祖霊に捧げる料理、飯、スープ、菓子、酒、茶等々、細大もらさじとばかりに息もつまるような描写が延々と続く。金器・銀器の粲然と輝く中でとり行われるそのしきたりのやかましき、年功序列の厳格さ、日頃はどうかろうと、事ここに到れば世襲貴族の体面にかけてその威厳を内外に示して余すところがない。(さしもの賈敬もこの時ばかりは本家の主座としての職責を果さざるをえない) 賈家一門の榮光は未来永劫ゆるぎなきもののごとくである。

公式の祭事が済んだあとは親戚、知人を招いたり、招かれたり、めでたい宴が何日となく続いてここに一月十五日、元宵節を迎える。到るところに花提灯が掛けられ、いくつもの酒席が設けられ、子供芝居が招かれたりして、内輪の楽しい宴が催される。とりわけ賈母の設けた酒席の豪華さは圧巻で、《紅樓夢》の数ある宴席描写の中でも屈指の精彩に富んだ個所といふことができよう。緋毛氈を敷き述べた三つの炕卓の上に造幣局から出たばかりのま新しい銅銭が緋色の紐を通されて運

ばれてくる。その紐を抽けば炕卓の上は銅銭の山である。折しも舞台の子供役者が賈母におもねためてたい口上を述べるや、「賞！」（褒美を！）の一声、それ！とばかりに女中たちは手に手に持った小さな籠で卓上の銅銭を山と掬って舞台狭しとばかりにこれをばらまく。表では賑やかに爆竹が引きも切らずに響き渡る——賈家一門は、文字通りいまやわが世の春を謳歌するがごとくである。

しかし、この豪勢な宴を中にはさんで、作者はその前後にまた宴席の陰影を描くことを忘れない。その一つは年の瀬も押しつまった頃、年貢を運んで来た黒山村の小作頭がしらがその納め高が少ないといつて寧国邸の当主賈珍になじられる場面である。それに対して小作頭は答えていう。例年になく天候不順であったこと、それでもこちらはまだましな方、あちらのお邸（榮国邸）の莊園の出来高はもつとひどく、おそらく勝手元は大変だろう。と。

それを聞いて賈珍はぼろりと本音をもらす。「榮国邸ではここ数年やたらと物入りが多く、特にここ一、二年は格別の赤字だろう。出ることばかり多くて入ってくるものはそれに見合つてはいないから、一、二年のうちにもう一度ご省親でもあつたひにはそれこそすつからかんだ！」と。

世に示した赫赫たる賈府の体面と引き換えに、貴妃省親のための大観園造営に関わる費用がどれほど莫大なものであつたか、そしてこれが大きな負担となつて賈府の屋台骨はすでにぐらつき始めていることをこの対話はよく示すのである。しかもその財政破綻の状況がかなり進行していることは、熙鳳が賈母の所有する品物を持ち出して銀に換えようとしているという話によつてもよくわかる。奥向きの日常経費もすでに不如意の状況に立ち至つていふことである。

また一つは、この宴席で熙鳳の語る笑い話の落ちが期せずしてすべて不吉な「散了」（ばらばらになる）の語で終わつてゐることである。第22回に同じく元宵夜宴の描写があつたが、灯謎の答えの中に「爆竹」があり、賈政はそれを見てその散じ果ててしまうことに不吉な予兆を感じて眉をひそめた。いま熙鳳はいずれも元宵にちなんだ話の中で続けざまに「散了」の語を用いた。始めの話は、みんなに話の先をせかれての挙句が「底下就團團的坐了一屋子、吃了一夜酒就散了」（その先

はね、ぐるっと円く部屋いっぱいにかけて、夜通し酒盛りをして、それで「おしまい」である。

熙鳳の次の話は、大爆竹を担いで郊外へ鳴らしに出かけた聾の男が、途中で誰かが点火して鳴らしてしまったこともわからず、見物人がみな散り散りになってしまったのを見て（衆人関然一笑都散了）、「爆竹売りのやつ、すっかり塞いでおかないから、鳴らさぬうちにばらばらだ」（賣炮仗的捍的^{ちり}不結實、沒等放就散了）とぼやいたというものである。

そしてまた彼女は、夜もすでに更けたとあって、「わたしたちも聾の爆竹よろしく、おしまいにしましょう」（咱們也該聾子放炮仗、散了罷）の語を以て夜宴の締め括りとする。ことみなすべて団円を以て吉とするこの元宵の佳節に、みな「散了」になってしまふ話に大笑して打ち興じている。賈政の感じた不吉の子兆を作者は同じく元宵の盛宴をかりてここにまた配している。

第62、63の両回は賈宝玉の誕生祝いについての描写である。探春の言に「一年十二ヶ月、毎月いくつかの誕生日がある。」とあるが、四百人を上回る大世帯ともなればむべなるかなである。がその中であつて榮国邸の御曹子賈宝玉の誕生祝いが格別であるのはいうまでもない。あちこちからお符、お護り、衣服、寿桃、素麵、荷包（巾着）、扇子、玩具等々、われもわれもと贈り物を届けに来るのは例年の通りである。その一々に布施したり、麵を振る舞つたりするのもまた慣例である。

が、この表向きの祝宴とは別に大観園の中で探春の発案による無礼講の酒宴が催される。姉妹、侍女たち打ち揃つて酒令やら拳やら、缸一本を空にしてこの時とばかりにはしゃぎ回る。碁を打つ者もあり、釣りをする者もあり、遊び疲れて花の下に眠る者もあり、といったあんばいで、大観園は依然として美しき楽園である。

けれどもここに気になることが二つある。一つは、この酒宴を催すべく姉妹揃つて大観園に入る時、宝釵は老女たちに門の戸締りをさせたあとで鍵を取り上げて自分で保管することについてである。宝釵はなぜそのようなことをするのか。それ

はこのところ園内でしきりに紛失物があり、嫉妬と羨望の渦巻く中でついには賈政の第二夫人趙氏にその矛先が向けられるというような事件があったからである。王夫人は老妃薨去のためにそちらに出向いて留守、熙鳳は現在病床にある身、熙鳳に代って探春が取り仕切っているが、いざこざを未然に防ぐべく宝釵は園内の出入を嚴重にするのである。彼女たちは一見楽しく遊び回っているように見えるが、今や深窓に育った姫君たちが陰では金銭の出納から園の管理まで奥向き一切のことに心を碎かなければならぬほど奥の秩序は乱れ、家事の取締りが弛緩していることをここに示すのである。

また一つは、次の日、平兒（賈璉の侍妾）がお返しのの酒席を設けるが（彼女の誕生日は宝玉と同じであるため、一緒に祝福された）一同楽しく戯れ合っているその折しも、寧国邸からの使者が見えて賈敬の死を報せる。しかもその死因は仙人になるべく自分で作った丹砂のの服みしくじりであった。その報に接するや、尤氏（寧国邸の当主賈珍の妻）らはただちに身に帯びた飾り物の一切をはずした。今の今まで、誰がこの事態を予想しえただろうか。喜びががらりと暗転する事件の出来である。最前までの紅事（喜事）はたちどころにして白事（喪事）に変わってしまうのである。

第75回は寧国邸における仲秋夜宴の描写である。当主賈珍は父の喪中にあるため大つぴらに仲秋の節句を祝うわけにはいかないで、せめて十四日に人並みのことをしよう、と、とりどりの料理を並べ妻妾たちを集めて簫を聞き、拳を打ち、酒令を楽しみ、心ゆくまで月を賞でる。と、その時どこからともなく長いため息が聞える。一同総毛立ってその声の方向をたずねるが何の気配もない。祠堂のの辺りにうす気味悪い風の音が通り抜けるばかりである。夜気は一段と冷え、月は次第に光を失っていく何とも不気味な夜宴である。

賈家において、かつてこれほど寂しい夜宴があったらどうか。賈家一門の隆盛もいよいよ来るべきところへ来たかの感を免れないが、作者はかくあることをこの宴の描写の前に巧みに敷陳して見せる。一つは賈母の言である。

「都是些什麼？上幾次我就吩咐過、如今可以把這些燭了罷、你們還不聽。如今比不得在先的時光了。」

(——いまは到底以前のような暮らし向きではなくなっているというのに)

これは賈母の食膳にその都度各部屋から料理が届けられるしきたりに対して、今はもう取り止めるように何度も注告しているにも拘らず改まらないことを糾している語である。

また一つは、尤氏の口にするご飯が下々の者の食べる米飯であるのを見とがめた賈母が、奥さまに何故そんなご飯を差し上げるのかと糾したのに対して、女中が次のように答える。

「如今都是可着頭做帽子了、要一點兒富餘也不能的」

(この節では万事、頭に合わせて帽子を作るといったあんばいで、ほんのわずかのゆとりをみておくことだって出来ない相談です)と、上等なご飯は今日姫さまが一人ふえたために少々不足して切らしてしまった旨を告げるのである。一年のうちには必ず巡り来るいくつもの節句の宴を型通りに催してはいるものの、それこそ「いまは以前のような工合にはいかなくなっていく」のである。

この回はまた別に賈母を中心とした仲秋の宴が大観園で催される。団圓に因んでお供え物は瓜、月餅、テーブルも椅子もみな円形のものを使用して家族で円陣を作るようにして坐る。ところが今はその円陣がすべて埋まらない。半分あまりが空席である。それを見て賈母はいう。「以前なら今夜のようなきには男女合せて三、四十人は集って賑やかなことといったらなかった。それが今ではこんなに小勢になってしまった……」と。老夫人の頭の中は常に過去の栄光との比較のそれであった。

第76回は前回の仲秋の宴を受けて、賈母が孫たちと共に再び団圓を楽しむ場面である。それにしても少人数になってしまった現状をまのあたりに見て、この世のことはとかく思うに任せぬものよと賈母は長嘆息する。それでも大杯傾けてつとめて景気付けをせんものとはかるが、そこに届いた報せは賈赦(榮国邸の当主)が石につまずいて足を挫いた、というもので

あつた。挫折—— 万事思うに任せぬ事態はすでに寧国邸のみならず、ここ榮国邸の深奥部にまで、しかも急速に進んでいくことを作者は皮肉にも明月団円をかりてその陰影を見せるのである。

(三) 後40回における宴うたげの描写

第85回は賈政の郎中昇任と林黛玉の誕生祝いについての描写である。祝い事がたまたま二つ重なつたこの日の祝宴の様子は、賈政の昇任を祝つて王夫人の親戚から子供芝居の一座が贈られ、表座敷には仮舞台が設けられて十幾つものテーブルにみなそれぞれ座を占めるといふ賑やかさである。酒や料理についての特段の記述はないが、これが久々にめぐつて来た晴れがましい酒宴であることはいふまでもない。にも拘らずこの日演じられた芝居の外題が「冥昇」(昇天)、その曲中の文句が「人間只道風情好、那知道秋月春花容易抛、幾乎不把廣寒宮忘却了」(—— 思いきや、秋の月、春の花、たちまちにして移ろうを——)であつたり、また的一幕は飢えをしのぐ場であつたり、幻想を見せる芝居であつたりする。昇任、誕生祝いという酒宴におよそ応わしくないことはいふまでもない。

折も折、そこに薛蟠(宝釵の兄)の殺人事件がもたらされる。暗雲は賈家のみならず近い身内にまで迫つて来たことを讀者はここに知らされる。

第94回は、宝玉の住む怡紅院の海棠が十一月に見事な花を咲かせたといふので、賈母が花見の宴を催す場面である。しかしこの花の季節はずれの狂い咲きには誰もが奇妙な思いを抱かざるをえない。探春はこれを妖孽として不祥の前兆とみた。賈赦は花妖とみてこれを切つてしまふべきだとした。賈政は怪を怪としないで放つておくのがよいとした。熙鳳もまた奇異とした。ひとり賈母だけがこれを是非とも吉兆と見立てたかつた。そこで強いて酒宴を命じたのである。賈母とてそれが尋

常でないことを感ぜぬはずはないが、よし凶と出たときはこの老いぼれの身一つが全てを引き受けようと、これは起死回生の悲願をかけた賈母の毅然とした、しかし実は悲しい酒宴であった。

それによく応えたのが天晴れ熙鳳であった。彼女は病床にあったが直ちに二疋の紅絹を贈り、それを海棠の木に掛けて吉兆ということにしてしまえ、というものであった。賈母に一喝されるとさすがと引き下がってしまった男たちに比し、病んでなお取り仕切らざるをえぬ熙鳳がむしろ哀れでさえある。一門の柱となるべき男たちが揃いも揃って無力無能、賈家一門の采配の図をよく示す部分である。

それかあらぬか、その日宝玉の首に掛けたあの命綱とも見なされる通靈宝玉が紛失し、上を下への大騒ぎが後に続くのである。

第105回には、賈政が外省の任を解かれて都詰めとなったその帰還を祝う酒宴の様子が描かれている。堂内いっぱい宴席が設けられ、いまでも賈政が客に酒を勧めているその時、遽かに群王率いる軍卒たちに門を固められてしまう。いかなる事態の出来か、しかもそれは榮國邸のみならず寧國邸においてもまた同様である。勅旨による家産差し押えであった。賈政が外省の官と通謀したという理由によるものである。祝宴に招かれて一堂に会した親戚友人たちはわが身大事とばかりに一斉に散じ果て、あとには愁嘆場が残されるだけである。

第108回は、公事沙汰が一段落したところで、賈母が銀子一百両をはずんですでに宝玉の嫁となった宝釵のために誕生祝いを催してやる場面である。家産没収の憂き目にあった後のこと、誰も彼もが以前のように晴やかな気分にはなれない。酒令をしても、骰子を振っても一向に盛り上がらない。何かといえは昔をしのんで黙りこくってしまう。たまたま実家帰りをした孫娘は賈母を喜ばせるどころか、夫のつれなさを涙ながらに訴える。さしもの熙鳳の話術もここでは一向に冴えない。あ

れほど騒ぐことの大好きな宝玉ですら途中で座を外してしまい、今はすでに廢園と化してしまつた大觀園の中をさまよい歩き、往事をしのんで涙する。《紅樓夢》の宴という宴の中で常にその主座を占めていた賈母にとって、これが生涯の最後に見た宴の実態であつた。（賈母は第110回でその生涯を閉じる）

第17回は、賈政、賈璉の留守をいいことに賈芸、賈薈、賈環らが昼となく夜となく宴席を設け、幫間を呼んでは飲めや歌への乱痴氣騒ぎをする場面である。興に任せて酒令やら拳やら落し話やらと遊びまくるのだが、その何れをとつても下劣極まりないもので、もはやかつてのあの数々の宴席の優雅、高尚さはここには求むべくもない。そして一同大博奕を打ち、やがて夜も更けた頃、そこに出来したのは惜春（賈珍の妹）が髪を下すという傷ましい事件であつた。

以上《紅樓夢》120回中における主たる宴の場を取り上げてその描写法を前80回、後40回に分けて行つてみたが、描写の細密さの点において後40回は到底前80回には及ぶべくもない。とりわけ前80回における春夏秋冬、折にふれ時にふれ、贅の限りを尽くしての酒宴の描写は、その豪華さにおいて、その高尚さにおいて、その緻密さにおいて、さながら絵巻物でも見ることが多くである。そこでは、作者は実に念入りに熱情込めて酒宴描写のための筆を大いに揮つていと見ることが出来る。が、後40回における酒宴については、作者はむしろ酒宴描写にもはや多くの紙筆を費やすことをしない。もっとも第108回における賈母にとってはこれが最後となる酒宴では、後40回におけるいずれの酒宴よりもいささかその描写に彩色が施され、久々に曲牌の名で勝負を争う遊びによって辛うじて従前の宴の雰囲氣をのぞかせるが、精彩を欠くことは免れない。このことについて鄭奇氏は次のように述べている。

後40回の飲食生活に対する描写は極めて粗略である。前80回に比べて大いに遜色がある。甚だしきに至つては、賈母の喪葬、宝玉の結婚というこの二段においても筵席について描写することができない。これはもとより賈府衰敗の筋の發展

と関係があろうが、主要な原因は、封建貴族の飲食生活に対して作者が深い観察、研究、体験が欠乏しているからである。そうでなかったら粗略にはしないで、むしろ詳細な描写を通して賈府の盛んなる時期のそれと対比させるはずである。ここにもまた曹雪芹と高鶚の二人の作家の水準の高低を見ることができ⁽¹⁰⁾る。と。

後40回が酒宴描写に筆を割くよりむしろ事を運ぶに忙わしいのは、いかにもストーリーが終焉に近づくがゆえの当然の帰結と見るべきであらう。が、全120回を通してただ一つここに共通していることがらがある。それは、宴があると必ず事が設けられているということである。いや、むしろ宴をかりて事を叙すといった方がよいかもされない。しかもその事はすべてただならぬ事であり、由って盛宴はたちまちにして散じ果ててしまうことである。いいかえれば、酒宴描写はむしろただならぬ事的前提として設けられているということである。

二、宴の象徴性について

中国の常言に「盛筵必散」の語がある。いかに盛大な宴席でもいつかは散会するときがくる、という意味である。つまりこれは宴うたげを無常の象徴の最たるものとして、すぐれて日常性の高いことばで説いたものである。祇園精舎の鐘の聲、沙羅双樹の花の色、これまた無常を説くことばではあるが、これを万人共有の飲食酒宴という、たじろがぬ生活言語を以てするところに中国文化の一特色を見る。

《紅樓夢》の中においてもこの常言はしばしば用いられている。たとえば第26回には、宝玉付きの侍女たちが何とかして引き立てられようと、お互いに競い合つてあれこれと仲間を批判する場面がある。上位に取り立てられて威張りかえっている侍女たちを腹立たしく思っている佳蕙が、紅玉にその憤懣を洩らすと、紅玉は次のようにいう。

「なにもあの人たちに腹を立てるには及ばないわ。ことわざにもいうじゃないの『千里に小屋を掛けたとて、終わ

らぬ宴はありはせぬ』（千里搭長棚、沒有個不散的筵席）って。誰だって一生くつついてることなんてできましょか——と。

また第72回には、侍女の司棋が母方の従弟と園内で密会しているところを、賈母の侍女鴛鴦に見つかってしまふ場面がある。司棋は鴛鴦にすがるようにして次のようにいう。

「——もしわたしが死んだときには、驢馬になり犬になってご恩返しをいたします。それに、ことわざにもいうではありませんか『千里に小屋を掛けたとて、終わらぬ宴はありはせぬ』（千里搭長棚、沒有個不散的筵席）って。もう二、三年もしたらわたしたちだつてみんなここから出て行かなければなりませんもの——」と。

しかしこの「盛筵必散」の語が最も強調されて用いられているのは第13回である。この回は秦可卿の死という大きな事件を描いているが、熙鳳は夢うつつの中に可卿のことばを聞く。それは可卿が賈府の行く末を案じて熙鳳に遺したことばである。

「——もし今日の栄華がいつまでも続くものと思つて、あとあとのことを考えないでは上策とは申せません。目の前には間もなくまた一つの非常におめでたいことが待つておりまして、それこそ燃えさかる火で油を煮えたぎらせるような、花に錦を添えるような、それはそれはたいへんなおめでたですの。でも、それとてつかのまの栄華、一時の歡樂に過ぎないということを知らなければなりません。くれぐれもあの『盛んな宴もいつかは果てる』（盛筵必散）ということわざをお忘れなきよう——」と。

第13回は《紅樓夢》が「盛筵必散」に終ることを総括的に暗示した重要な回である。

《紅樓夢》に宴席描写の多い理由は、ただ家庭閨閣内の「平々凡々、日常茶飯の事を叙せんとした」^①がためではない。それはこの書が「平々凡々、日常茶飯の事」をかりて「無常」を叙せんとしたためであると考えられるものである。このように盛筵が必散を約束するものであること、そしてこのストーリーが無常をベースとしていることはすでに第5回に提示されて

いる。第5回は、寧国邸で觀梅の宴が開かれたとき、宝玉が秦可卿の部屋に眠った夢の中で警幻仙姑から飲饌・声色の幻なることを教えられる。しかし宝玉は結局なにも悟られず仕舞いに終るのだが、その宴席に用意された酒肴のかずかずは到底この世のものとは思われぬものばかり。しかも酒興の出し物は世間の芝居の曲とはまるで異なる「紅樓十二曲」である。宝玉は仙姑に勧められるまま歌詞に目を通すが、そこに記されていたことは世事ごとくままならぬことを示すものばかりである。そもそもその曲名からして終身誤・恨無常、分骨肉・好事終・飛鳥各投林、等々、不吉な文字が並ぶ。△紅樓夢▽の宴をかりて無常を叙する筆法の典型は、実にこの第5回にあると見てよいだろう。

そこで振り返られるのは開卷第一回、物語りの由來說き明かしの前に置かれている一詩である⁽¹²⁾。

浮世着甚苦奔忙 盛席華筵終散場

悲喜千般同幻泡 古今一夢盡荒唐

謾言紅袖啼痕重 更有情癡抱恨長

字字看來皆是血 十年辛苦不尋常

作者（おそらくは）はここに「盛席華筵終散場」の語を以て自らの文学営為が「無常」に端を発することを述べているものと考える。作者が無常の象徴として取り上げたものは盛席華筵のほかになお幾つかを数えることができる。それは女兒であり、紅であり、花であり、そして夢である。いずれもつかのまのいのちをしか保ちえぬはかなく空しい現象である。主人公賈宝玉はその特異な性情から、この移ろいやすい現象に人一倍執着するが、これらがいずれも抽象的であるのに対して宴は具象的である。作者は無常を叙するに事象と心象とを巧みに絡み合わせて纏綿たる情緒の世界を作り上げたといえる。

三、構成上からみた宴について

この世の中の無常の現象をわれわれの身の回りで最もよく具現している事象は何か、それこそは貴賤の別を問わず、学識の有無を問わず、万人共感の「盛筵必散」であった。《紅樓夢》は大小それぞれ多種多様の宴の奏でる悲音を連ねて、「無常」という名の旋律を全篇に流して、それをこの小説の基調音とした。そしてその無常の調への中で一千にも余る登場人物が、それぞれに運命づけられた生涯を万斛の涙を以て演じては消え、演じては消えていくのである。《紅樓夢》の随所に按配された宴の描写はこの小説の構成上において絶対に欠くことのできぬ、最も重要な役割を担っているといってもよい。

それでは《紅樓夢》は無常を嘆じた書であるのか。無常観はいかにもこの書を覆いつくす一大要素である。が、それはあくまでもこの書の基調音であって主題ではない。作者がこの無常の旋律をバックに描きたかったものは何なのか。その大方が無常の波に翻弄され、与えられた運命に殉じていく哀れな姿をわれわれは随所に見た。賈府の栄光から没落への過程、わけても金陵十二釵のたどる悲惨な運命はたしかに《紅樓夢》を無情の書と決定づけるに十分であろう。

しかしここで再びあの開巻第一回の詩に立ち戻ってみたい。

浮世着甚なごのたむじか 苦はなはだ奔忙する

盛席華筵終つひに散場

悲喜千般同どもに幻泡

古今一夢盡ことごとく荒唐

謾みだりに言ふ紅袖啼痕重しと

更に情癡有り恨みを抱くこと長し

字字看來れば皆なみだこれ血

十年の辛苦尋常ならず

ここには嘗々十年、「仮語」を借りてひたすら「真事」を語り続けてきた一人の男の、疲れ果てた姿が浮かび上つてはこないだろうか。ここに至って作者の胸に去来したものは何だったろうか。所詮、浮世のことは空しくはかないもの、悲しみも喜びもすべてこれ幻まぼろし。今のこと、昔のこと、これまたすべて一場の夢。そしてその夢幻のあとに残されたものは何かといえ「情癡の長恨」という、永遠に解消されることのない一つの無惨な傷痕であった。その長恨の種とは何か、それがこの書の主題であろう。けれども主題の追求はこの稿の目的とするところではない。ただ、大方がその人生を無常の波に翻弄され、飲み込まれていってしまう中であつて、ただ一人、この波にあらがって自己の人生を作り上げようとした一つの強烈な個性が存在したことだけは確かであろうと思う。《紅樓夢》の構成上において無常観は全篇を覆いつくす基調音である。がそれはこの書の主題ではない。

一般に《紅樓夢》を読むとき、宴うたげの描写にぶつかると、またか、またかと思うのは事実である。けれどもその盛席華筵をむしろ散場の前提として設定するという構成は、おおむねの文学がその酒宴描写において美味追求、美味礼讚、あるいはまた饗応術に終始するのに比して、これは《紅樓夢》独自の手法ではないだろうか。

むすび

中国人にとって宴うたげはあらゆる意味において最も誤しむことのできる場面である。誤しむとは、そこに人生の全縮図を見たとる意味においてである。宴のありようによってすべてが見えてくるのである。顕在する事象はことごとく「仮」であり、その陰に潜在している事象こそ「真」であるという《紅樓夢》の定理からすれば、女兒おしめとは老いるもの、紅べにとは褪せるも

の、花とは散るもの、夢とは覚めるもの、そして宴とは散じ果てるものなのである。《紅樓夢》はその事象の結果する「真」を見つめぬいたところから出発した、実に醒めた文学なのである。

ゆえに、《紅樓夢》に頻出する宴の描写はただ単に平々凡々なる日常茶飯の事を記すための具でもなく、またただ筋を繋げるために点綴されたものでもなく、それはこの書の思想、主題の揭示に関わる、ゆるがせにすることのできない重要な役割を担っているものと見なければならぬのではないかと考える。

(注)

- (1) 昭和十五年第一次翻訳本
- (2) 「盛席華筵終散場——試析《紅樓夢》前八十回的筵宴描写」《紅樓夢》研究 一九八四・一（八九—九二頁）
- (3) 「紅樓夢研究集刊」第七集 一九八一・一〇（三九五—四四六頁）
- (4) 「紅樓夢研究集刊」第八集 一九八二・三（四二—四三〇頁）
- (5) 「紅樓夢学刊」一九八八・第三輯（二〇五—二二二頁）
- (6) 「紅樓夢学刊」一九九〇・第四輯（二九—二九八頁）
- (7) 「紅樓夢学刊」一九九七・第一輯（三二五—三三二頁）
- (8) 脂評によれば、舅賈珍に逼られて密通。発覚してついに縊れて死ぬ
- (9) 灯籠や吊り提灯に詩句などを書き付けておき、これを解いた人は答えを紙に書いてそこに貼り付けておくという遊び
- (10) 「紅樓夢筵席美学賞析」《紅樓夢》研究 一九八八・一（二三—三九頁）
- (11) 国訳漢文大成《紅樓夢》解題
- (12) 「甲戌本」にのみ見られる。作者の筆とも、また評者脂硯齋その他の筆ともいわれる
- (13) 徐恭時「《紅樓夢》究竟写了多少人物」《紅樓夢》研究 一九八二・七（五三—五六頁）